［別紙2］

審 査 の 結果 の 要 旨

氏名　　菊地宏久

本研究は1992年10月から1999年8月にかけて一地域の病院を受診した在日日系ブラジル人女性493名と日本人女性1835名に対し子宮頸管部*Chlamydia trachomatis*抗原（DNAプローブ法）（以下、クラミジアと呼ぶ）の感染疫学調査を行ったものである。また対象は別であるが避妊方法、クラミジア抗体検査、抗生剤の常用スタイル、性感染症に面したときのパートナーとの協力姿勢、喫煙率についても調査を行い二群間の行動の差違を検討し、下記の結果を得ている。

1. クラミジア抗原検査陽性率は在日日系ブラジル人女性で0.41％（2／493）、日本人女性で6.8％（125/1835）と在日日系ブラジル人女性で低く、対象集団を未婚と既婚にわけて比較しても、また妊婦に視点をあててみても同様の結果であった。クラミジア抗原陽性率の年次推移をみると、日本人女性のクラミジア抗原陽性率は約5％～8％の間を変遷しているが在日日系ブラジル人女性では約0％～1％と極めて低い陽性率を維持していた。
2. クラミジア抗体陽性率においても、日本人女性28.0％（14/50）に比べ在日日系ブラジル人女性3.7％（1/27）で低率であった。
3. 日本人女性の主たる避妊法は未婚者、既婚者ともコンドームで、ピルの使用は極めて少なかった。一方、在日日系ブラジル人女性の避妊法は、ピルが主体であり、コンドームを使用する者は既婚者、未婚者のいずれにおいても少なかった。
4. 在日日系ブラジル人女性は抗生剤を日本人女性よりも日頃から頻繁に内服する傾向があるか、否かを検討したが結果は否定的であった。反対に日本人の方が抗生剤を頻回に内服している傾向が見られた。
5. 在日日系ブラジル人女性は性感染症治療に関しパートナーの協力を求める度合いが高いこと、そして喫煙行動は低いことがわかった。

今回の研究により、避妊法では在日日系ブラジル人女性でのコンドーム使用率

が極めて低くピルの使用率が高いにもかかわらずクラミジア感染率が低い可能性が示唆された。そして日本人女性との具体的な行動様式の違いとしてパートナーとの積極的な協力姿勢、非喫煙行動、病気に対する自覚の高さが示唆された。

さらにクラミジア抗原陽性率の変遷にも視点をあてている。1908年日本人がブラジルに移民した当初は日本人も日系ブラジル人も同じクラミジア抗原陽性率であったと仮定すると抗原陽性率を一つの同じ時間の関数として表すことができ、クラミジア抗原陽性率の変遷は差分方程式　$X_{n+1} = u(1-X_n)X_n$　（X_n は感染n世代のクラミジア抗原陽性率を表し、u は調査対象ことに決まる定数で性行動、時間、社会環境をも含む陽性率の変遷を表す）で表現されることが示唆された。これにより『対象集団の性行動の定量的指標 u 』を決定し、u の値により対象集団を客観的指標によりカテゴリー化できる。現在の在日日系ブラジル人女性のケースは　$u \leqq 1.0$の場合に対応し、日本人女性のケースは $1.05 \leqq u \leqq 1.11$に対応する。在日日系ブラジル人女性のケースのように$u \leqq 1.0$の場合はクラミジア抗原陽性率が減少していることを示している。u の値に影響を与えるものは今回調査した項目など総て考えられうるが、u の値を大きく低下させる因子がそのその時点においては対象集団にとって極めて重要な危険因子であることが示唆される。その危険因子を求めそれを排除することが重要であるとしている。この考え方を用いることによりさらに有効な性感染症の予防対策が得られる可能性を示した。

以上、本論は在日日系ブラジル人女性と日本人女性の行動の違いを通し在日日系ブラジル人女性のクラミジア抗原陽性率が低い理由を検討した。本研究はクラミジア感染症を含む性感染症予防対策に重要な貢献を成すと考えられる。よって、学位の授与に値すると考えられる。